

CeMI 気象防災支援・研究センター
News Letter

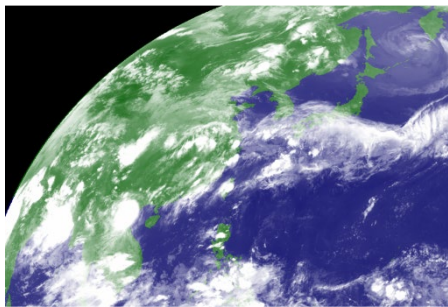
Contents

1. 梅雨
2. 線状降水帯について
3. お天気よもやま話
～虹に出会うコツ



1 梅雨

雨の季節が近づいてきました。『梅雨』は四季の変化の中で盛夏期を迎える前に訪れる雨季です。5月中旬頃、沖縄方面で始まった雨季は約一か月をかけて北へ、東へと東北地方あたりまで広がっていきます。また、この雨の季節は日本だけではなく、中国大陸や朝鮮半島でもみられ、「梅雨」と同じようにそれぞれの地域で特別の呼び名で表されています。



さらに広い範囲に目を向ければ日本や中国大陸だけではなく、南アジアから連なる雨季であることが分かります。5月に入るとインドなどベンガル湾沿岸の地域で

はそれまでの乾期が一転、突然のように雨季が訪れます。同じ頃インドシナ半島でも雨の季節が始まり、やがてそれがアジアの東の地域にも及んでくるのです。

北半球を取り巻いて西から東に吹く上空の強い風や日本の西、中国大陸奥地にある広大なチベット高原など大きな自然環境の中で出現する現象です。

今年は雨期に入る前のインドで、猛暑のニュースが伝

えられました。また、ミャンマーでは雨が少なく水力による発電量が減って停電が頻発しているとのニュースもあり、雨季の訪れによる雨を心待ちにしているとのこと

です。地球全体で見れば、水資源は決して豊富とは言えません。その中で梅雨や台風によって雨がもたらされる日本は世界でも有数の水資源が豊富な国です。農業をはじめ様々な産業で水の需要が増える盛夏期を前に梅雨の雨は天からもたらされる最大の恩恵とも言えます。一方で、梅雨や台風による雨は大きな気象災害をもたらすこともあります。梅雨前線による大雨、集中豪雨は毎年のように繰り返し発生しており、それを防ぐために莫大な費用と労力、資源が投入されています。大雨による洪水や土砂災害を直接防ぐことは困難ですが、少なくとも人命の損失を防ぐことは可能です。大きな恩恵をもたらしてくれる雨によって、大切な命が失われることがあってはなりません。最新の気象の予測技術もまだまだ十分とは言えませんが、少なくとも大雨から人命を守るといえることは可能になってきています。雨による恩恵は受けても、雨による災害からは身を守るため、事前の備えと情報の積極的な利用により素早い適切な防災行動につなげてください。



2 線状降水帯について

気象庁では、頻発する線状降水帯による大雨災害の被害軽減のため、6月1日から線状降水帯の予測を始めます。

そもそも、線状降水帯とはどんなものでしょう。気象庁の解説では、「次々と発生する発達した雨雲（積乱雲）が列をなした、組織化した積乱雲群によって、数時間にわたってほぼ同じ場所を通過または停滞することで作り出される、線状に伸びる長さ50～300km程度、幅20～50km程度の強い降水をともなう雨域」とあります。

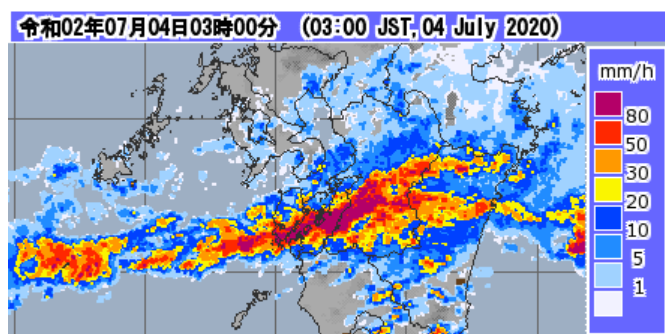
右図はまさに「線状降水帯」ですね。令和2年7月4日午前3時のレーダー図ですが、非常に発達した雨雲が線状に東西に延びています。この事例では12時間程度同じところに停滞して記録的な大雨となり、球磨川が氾濫するなどの大きな災害が発生しました（ニュースレターvol.2参照）。

この事例のほかにも、近年は、平成30年7月の西日本豪雨、平成29年7月の九州北部豪雨など大きな大雨災害が発生しており、いずれも線状降水帯が見られました。線状降水帯が発生した場合には、より被害を大きくする要因と言われています。

このため気象庁では、令和3年6月より、大雨時に災害の危険度が急激に高まっている状況で、線状降水帯によりさ

らに集中豪雨が降り続くような場合に「顕著な大雨に関する情報」を発表しています。

それに加えて、冒頭にあるように線状降水帯の予想を始めます。これは、線状降水帯による大雨発生の可能性が高い場合に、可能性を半日程度前から気象情報において呼びかけるものです。とはいえ、線状降水帯の予測の精度は、「地方予報区単位での的中確率はおよそ4回に1回」と言われています。ただし、線状降水帯の発生の有無に関係なく大雨の可能性が高いときに発表される情報ですので、この情報が出た場合には当該地域では、大雨に対する警戒態勢をより高いものとする必要があるでしょう。

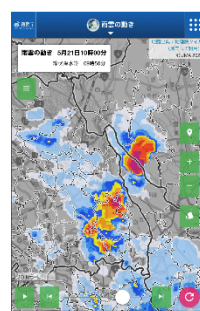
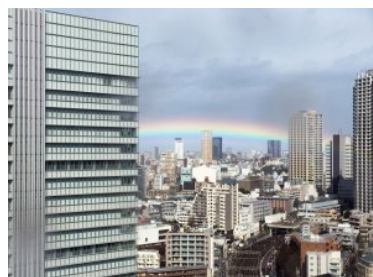


3 お天気よもやま話 ～虹に出会うコツ

雨上がりに出会える虹。雨の季節という気が重くなりがちですが、虹に出会うチャンスは増える時季という事もできます。虹は、空気中に漂う水滴（雨粒）で、日光が曲がったり反射したりして色が分かれて見える現象です。虹が現れるのは太陽と反対側の方角になります。空が良く見える開けた場所ですと太陽の位置もわかりやすいですが、街中で建物に囲まれてる時などはすぐにわからないこともありますね。そんな時は自分や建物の影を探し、その延長線上の空を眺めてください。雨粒がスクリーンの役割をし、虹が見えることがあります。虹が見えるための太陽と空気中の水滴と私たちとのおりなす角度は42度と決まっています。そのため、太陽高度が高い昼前後の時間帯は、虹を見ることはできません。夕立の後に見えることが多いのは、こういう理由もあるのです。また、その42度という角度が決まっているために、太陽高度が高い時は背の低い、横広がり虹が見え、太陽の位置が低くなるにつれて背の高い、半円に近いような虹になります。

虹というと半円を思い浮かべる方が多いですが、「横広がり虹もある」と意識すると、虹を発見しやすくなるかもしれません。

虹に出会うタイミングは、雨が止んですぐ、まだ隣町では雨が降っているくらいがベストです。気象レーダーの雨量情報



気象庁 雨雲の動き

の画像を動画再生して見ると、雨雲の動きが把握でき、そのタイミングを見計らうことができます。今は、気象庁の「雨雲の動き」をはじめ、様々なアプリでもレーダーによる雨量情報を見ることができます。いざという時にも役立ちますので、日頃から使い慣れておいてください。



掲載内容へのご意見、その他サービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構 (CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

📠 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

